

埼玉にもある!ナラガシワ、埼玉にはない…ミネカエデ ～植物標本から分かること～

須田 大樹

自然系博物館の役割の一つに、自然史標本の収集・保管があります。美術品や歴史資料、化石などのように、一点もので重要なものを収集する意義は分かりやすいですが、植物標本では同じ種の標本をたくさん集めており、「なぜ?」と尋ねられることがあります。役割は大きく2つあります。

1つ目は、たくさん集めて比較検討することで「違い」を明らかにする、分類学上の役割です。新種の発表は標本をもとに行われており、発表時には根拠となる「タイプ標本」を指定する必要があります。タイプ標本は、後に検証を行ったり、近縁種を検討したりする際に参照される、世界的に重要なものです。タイプ標本以外にも、同じ種の中で形態にどのようなバリエーションがあるのか把握したり、さらなる「違い」を探ったりする上で、なくてはならないものです。博物館に蓄積された標本の中から、これまで知られていなかった新種が見つかることもあります。

2つ目は、各時代、各地域にどのような植物があったかを示す、データベース・アーカイブとしての役割です。標本の情報は、地域の植物相の把握や絶滅危惧種の検討、各植物の分布や生態に関する研究などに役立てられています。データだけではなく実際に標本が保管されていることで、利用者は博物館の標本庫を訪ねて確認し、より正確な情報に基づいて検討を進めることができます。



写真1 当館の植物標本が保管されている収蔵庫

今回は当館の植物標本(写真1)が後者の役割を果たした事例として、埼玉県内の樹木の分布に関する2つの研究を紹介します。

埼玉にもある!ナラガシワ

ナラガシワは、国内では本州・四国・九州に分布するブナ科コナラ属の落葉広葉樹です。西日本では沖積低地や雑木林などに生育しますが、関東ではとても少なく、埼玉県内でも具体的な分布や生育環境は知られていませんでした。

はじめに、当館をはじめ関東各地の博物館に収蔵されている標本を調べたところ、「ナラガシワ」とされていた標本の多くが他のコナラ属(カシワなど)や種間雑種(カシワ × コナラなど)の誤認であることが明らかになりました。

次に、確かにナラガシワであると確認した標本の産地情報などを参考に、ナラガシワの生育状況と生育立地に関する現地調査を行いました。

これらの結果、やはり関東地方ではナラガシワの分布は極めて少なく、自生地は沖積低地や山地下部の沢沿いに限られることが明らかとなりました。埼玉県内でも、越辺川・高麗川水系の河畔林(毛呂山町・日高市・坂戸市)や荒川沿いの斜面林(秩父市)で、ナラガシワの生育を確認することができました(写真2)。

なお、関東各地の縄文時代の遺跡からナラガシワが見つかっており、数千年前の関東平野には現在よりも広く分布していたことがわかっています。沖積低地を中心に分布したナラガシワが、耕作や開発などによる河畔林の減少に伴って減少し、現在のような隔離的・残存林的な分布になったものと考えられます。

この研究により、過去の沖積低地の植生を理解する上で重要な種であるにもかかわらず、人知れず絶滅していく可能性もあったナラガシワの存在に、改めて光を当てることができました。

(参考) 須田大樹, 2018. 関東地方におけるナラガシワの分布とその生育立地. 当館研究報告 12, 17-24.



写真2 埼玉でも確認されたナラガシワ（毛呂山町）

埼玉にはない…ミネカエデ

ミネカエデ（写真3）は、千島列島から北海道、本州中部にかけて分布する、ムクロジ科カエデ属の落葉広葉樹です。古い文献では、埼玉県内にミネカエデが分布するとしたものもありましたが、最近ではその存在が疑問視されていました。

秩父地域はカエデ属の種類が多いことが知られ、当館でも「カエデの森」を整備して埼玉の生物多様性のシンボルとして紹介しています。また、秩父では樹液を煮詰めて作ったシロップを用いた商品開発が行われ、森林資源の活用と町おこしを両立する取組みとして注目されています。一方で、ミネカエデの有無が確認できないことにより、県内に分布するカエデ属が20種なのか21種なのか、混乱の元になっていました。

まず、ミネカエデが分布する可能性のある奥秩父山地の稜線において、ミネカエデおよび類似種（ナンゴクミネカエデ（写真4）・コミネカエデ）の有無を確認する現地調査を行いました。その結果、高標高域の主要な稜線を概ね網羅する延長約94km以上を踏査したにも関わらず、ミネカエデは発見することができませんでした。

次に、過去にミネカエデが生育した可能性について調べるため、埼玉産の植物標本を所蔵する当館および国立科学博物館・東京大学総合研究博物館等において、ミネカエデや類似種の標本調査を行いました。その結果、埼玉産で「ミネカエデ」とされていた標本21点のうち20点はナンゴクミネカエデ、1点はコミネカエデに改められ、埼玉産のミネカエデ標本は各博物館とも収蔵されていないことが明らかとなりました。

以上のような現地調査と標本調査の結果から、過去から現在まで、埼玉県内にはミネカエデは

分布していない可能性が高いと結論づけました。これにより、県内に分布するカエデ属の種数は「20種」となります。

このような混乱が続いてきた背景として、類似種のナンゴクミネカエデの命名・発表が比較的新しい（1962年）ことや、当初ナンゴクミネカエデの分布を「本州（近畿地方）・四国・九州」に限定する図鑑があったこと、また両種の区別の難しさが挙げられます。東日本でのナンゴクミネカエデの認知が遅れたことから、古い分類のまま「ミネカエデ」として埼玉に分布するカエデ属のリストに入ってしまったものと考えられます。

なお、各地の標本を確認していく中で、本州中部ではミネカエデは日本海側の山地、ナンゴクミネカエデは太平洋側の山地に、それぞれ分布することが見えてきました。埼玉におけるミネカエデの不在を裏づける意味からも、広域的な両種の分布の違いも標本（+現地確認）の情報をもとに整理していきたいと思っています。

（参考）齋藤透・加藤佳英・林由季子・須田大樹，2022．埼玉県内にはミネカエデ *Acer pellucidobracteatum* は分布しない，当館研究報告 16, 21-24.

（すだ だいき・学芸員）



写真3 埼玉には分布しないミネカエデ



写真4 埼玉に分布するナンゴクミネカエデ